

文春ブック・クラブ



決ヨロップ、特にドイツへの政治的と経済的の分離のフ、オード金脈は、個人的エビソ、しかし、世界的・軍事的影響力は是が非でも確保しておく。必要があったアメリカにとって、ヒトラーの対外政策への支持はパワー・ポリティクスの観点から合理化されると考えた政策担当者がいても何ら不思議ではない。

『香港——移りゆく都市国家』(時事通信社)

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学教授)

中国本土からみればケシ粒みたいな存在ですが、東洋と西洋の接点としての香港がなかったら、中国ひいてはアジアの現在が大きく違っていたはず。その意味では、香港は生きた世界史の舞台といってもいい。その香港が一九七七年に中国に返還されると

冷厳な同盟・敵対・牽制関係の構造の存在を照射している。そして、第二次大戦後、四十年経過した現在においても、米ソ、両ドイツをめぐるとこの基本構造には見られない。

この本を書くに至った動機でいうことは、単に香港だけでなく、欧州列強を中心にした近、現代史の幕が降りるといふことでもある。それに立ち会ってみようと思ったのが、この本を書くに至った動機です。

香港というところは、裸の中国社会というが、実に多様な魅力的な土地です。しかし調べていくうちに、意外にその歴史について書いた本がないことがわかりました。それで日本軍の香港攻略などあまり知られていない。香港上海銀行やジャーデン・マセソン商会といった大資本がたどって来た道は、そのまま資本主義、あるいは帝國主義發達史なんですよ。ですから香港の過去と現在の両方から香港を描こうと努めました。香港経

世界大戦史として、この二〇世紀の終章が書き込まれつつある今日、国際関係は確實に、こうした基本構造を軸にゆっくりと転換しつつある。こうした時代の真相の把握が今ほど必要なのは、あまりにも国際関係の「倫理」についての議論のみが目止まる。単純な正邪の二項対立図式に基づく「倫理」と歴史的エピソードの組み合わせによる国際政治評論が幅をきかす今日、「データ分析の職人」に徹する新世代による作業が、わが国の国際政治研究の水準を大きく引きあげてくれることを願わずにはおれない。

香港の将来については、あまり楽観していません。香港がどうしてこれほどまでに繁栄を享受できたかという点、政治を考える必要がなかったからです。しかしこれからは政治がいやおうなしに入ってくるわけで、香港問題はこれから始まるといってもいいでしょう。

表層の国際情勢の変化に一喜一憂するのはもうこの辺でおしまいにしよう。メビウスの輪のようにからまる国際関係の網の目を、目に見えぬ金脈を丹念に辿ることにより、国際政治のメタ・システムの真相を解祈する新たな学術の構築が必要とされている。

この本は、おそらく生涯に何冊もない、わたしのライフ・ワークのひとつになるだろうと思うんですが、気分としては、自分なりの香港に対する墓碑銘なんです。

頭痛 神経痛 歯痛に ケロリン 内外薬品